

【ガラスの茶室】構想_お茶と京都と万博

吉岡徳仁

1986年に桑沢デザイン研究所を卒業後、倉俣史朗と三宅一生のもとでデザインを学ぶ。

2000年に吉岡徳仁デザイン事務所を設立。デザインや建築、現代美術の領域において活動し、

自然をテーマにした人間の感覚を超越する作品は、国際的に高く評価されている。

2001年紙の椅子《Honey-pop》、2006年パンの椅子《PANE chair》、2002年から始まるガラスのプロジェクトなどの

代表作は世界的に評価され、ニューヨーク近代美術館、ポンピドゥー・センター、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、クーバー・ヒューイト国立デザイン博物館、ヴィトラ・デザイン・ミュージアムなどで永久所蔵品に選ばれている。

ガラスのベンチ《Water Block》は、パリのオルセー美術館の印象派ギャラリーにて、モネ、セザンヌ、ルノワールに代表される印象派の作品群とともに常設展示されている。アメリカ「ニュースウィーク」誌による“世界が尊敬する日本人100人”に選ばれている。



「ガラスの茶室 - 光庵」- 吉岡徳仁

「ガラスの茶室 - 光庵」は、2011年の第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展にて発表し、2015年には京都の將軍塚青龍殿の大舞台で披露され大きな話題となりました。

現在国立新美術館では「ガラスの茶室 - 光庵」を屋外に設置し、自然光のもとで変化する表情をご覧いただくとともに、パリのオルセー美術館にコレクションされているガラスのベンチ「Water Block」を併せて展示。

エネルギーを知覚化する日本の自然観は、茶道の思想にも受け継がれています。

光庵は、空間と時間の概念を超え、日本文化の根源を再考する作品。

光をガラスによって表現したこの茶室は、伝統的な掛軸や生け花はなく、降り注ぐ太陽の光により水面のような輝きを生み出し、クリスタルプリズムの彫刻から放たれる光は虹となり「光の花」が現れます。その光の建築は、物質の概念から解き放たれ、詩的な光景を浮かび上がらせます。

<作品例の一部>



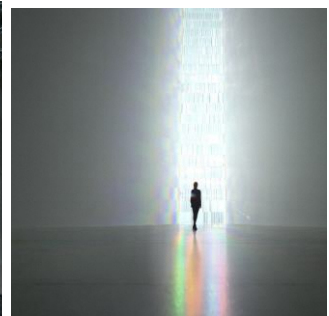
東京ミッドタウン



オルセー美術館



エルメス



虹の教会